

2004

ひびき

子どもにも人権がある

このような一人の子どもを受け入れる者は
わたしを受け入れるのです

Whoever receives one such child in my name, receives me

『ひびき 2004』

子どもにも人権がある

このような一人の子どもを受け入れる者はわたしを受け入れるのです

目 次

はじめに

- 「だれが、倒れている人の隣人になったのか」…………… 2
- 1 釜ヶ崎「こどもの里」
子どもにある底力に突き動かされて…………… 5
- 2 虐待のトラウマ
おれの父ちゃん、すごいだろう…………… 9
- 3 長崎「モナの会」
障がい児の親たちに理解と協力を…………… 13
- 4 「オリーブの会」
こんなに心もからだも楽になれた…………… 17
- 5 「聖母の小さな学校」
本当の自分を認め、生きる勇気を持た…………… 21
- 6 「南北コリアと日本の友だち展」
南北コリアと日本を結ぶ架け橋に…………… 25
- 7 自死者の遺児の思い
あの時、父の話を聞いていれば…………… 29
- 8 差別・偏見
差別は人を殺す道具です…………… 33
- 9 多文化のアイデンティティ
私はベトナム人なのか、日本人なのか…………… 37
- 「あとがきにかえて」…………… 41

付録：2004年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

「だれが、倒れている人の隣人になったのか」

(ルカ 10：25～37参照)

社会福祉委員会・カリタスジャパン

責任担当司教 池長 潤

キリスト教の信仰を持っている私たちにとっては、この大きな宇宙や、太陽系、そして地球、また地球の上に生きているすべての生きものは、神様が計画されたとおりに、それぞれの特徴を備えて存在しているということを知っています。自然の法則も、人間の能力や感情や心も、みな神様が与えてくださったものです。そして、この人間の心は、「善いもの」や「悪いもの」を見分けることができます。神様は、人間が「善いもの」を選んで毎日生きてゆくことを望んでおられることも知っています。

今、地球の上では、あらゆるものが、いろいろとお互いにつながりあって存在していることがわかってきました。北極にすむ生きものは、反対側の南極で起こっている自然の現象と深くかかわりあっていますし、自動車からはき出される排気ガスが、世界的なレベルで地球環境に悪い影響を与えることも知られてきました。これと同じように、人間のあらゆるしわざは、世界中にさまざまな波紋を投げかけます。例えば、どこかの国とどこか別の国が戦争をすれば、子どもや赤ちゃんの尊い命が奪われるだけでなく、戦火の中で命を失うことを恐れて、故郷をすてて安全なところに逃げてゆく人々が増え、「難民」の問題をまき起こします。

私たちは、テロや戦争が自然や人間を傷つけたり、むやみに命を奪ったりすることを認めることができません。だから、あらゆるでだてをつくして、神様が造られた大切なものを守らなければなりません。

でも残念なことに、いつまでたっても、人間は自分の利益を守ったり、憎しみを抱くことから、他の人を邪魔者にしたたり、他の人の大切なものを奪ったり、お互いに殺しあったりします。このようにして、毎日、世界のどこかで悲しい出来事が起きています。

今はテレビで、日々のこういった世界中の不幸な出来事を知ることができます。私たちはいつも、身近なところで、たくさんの苦しみに出会うのです。

一人ひとりの人が、自分自身のなかに、ほとんどとり除くことができないほどの痛みや傷を負ってしまうこともあります。

カリタスジャパンが、司教協議会から委託されて、1997年から四旬節に発行してきた「叫び」は、2003年からは「ひびき」と名を改めて、引き続き毎年出版して皆様にお読みいただいております。私たちがこれまでとりあげてきたのは、すべて私たちの身近な体験ばかりです。しかも直接の体験者からの生の声だけに、それだけ力強く訴えてくるものがあります。

今回お渡しする「ひびき2004」でもさまざまな生の声が聞かれます。大阪教区の「こどもの里」の荘保さんの話にあります、「小学生の頃から家出を繰り返していたC子が、中学を卒業して、ここで生活していたある日、ものすごい勢いで一時間くらい泣いたんです。その後、『大人は汚い』『自分の体を元に戻して欲しい』ってC子が訴えました。小学生のころから売春をさせられていたんです。『助けて』って叫んだのに、隣の部屋にいる母親は助けてくれなかったって……。最後に、『それでも私のお母ちゃんや』と、泣き崩れたのには衝撃を受けました」とあります。

北朝鮮の拉致事件について、日本人のこの事件に関する感情の側だけに立った一方的な北朝鮮の報道に対して「日本には朝鮮学校が118校あり、日本で生まれ、朝鮮学校に通いながら生活している在日コリアンの子どもたちが14,000人もいます。そのなかには、制服のチマチョゴリやランドセルを心ない日本人に切られたり、冷たい眼差しを向け

られたりして、心に傷を受けている子どもたちもいる。過去の歴史に何も関係ない一番弱い子どもたちの人権が、いじめや脅しによって侵害されてよいのだろうか」といった訴えがあります。戦時中、無数の朝鮮の人たちを強制労働のため日本に移住させたことは、日本人の記憶の中から消し去られてしまったのでしょうか。

今回の「ひびき2004」の中から2つの例をひいてみましたが、このように現実に大きな痛みの体験を持った人たちが世界にはいっぱいいます。皆それぞれに自分の人格の奥深くまで心の傷を負わされた子どもたちや大人たちです。しかし私たちは一生涯こうした人たちの痛みには一切触れず、ほとんど無関心で生きることもできます。それどころか、自分には関係ない他人事としてつっぱねることもできます。自分が知らず知らずのうちに他者に負わせた傷でさえ、「そんなものは自分の知った事ではない、今更とやかく言わないでくれ」と、突き放してしまうこともできるでしょう。私は、このような態度そのものが、自分が人間であることの尊厳と資格を放棄するものであると思います。

今年も「ひびき2004」を読んでいただいて、イエス様が「よきサマリア人」のたとえの中で、「誰がこの傷ついて倒れていた人の隣人になったと思うか」と問われたように、私たちも自分のまわりに傷つき、痛み、倒れている人に深く思いを寄せ、その隣人と共に生きる行動へとつながっていけばすばらしいと思います。

子どもにある底力に突き動かされて

暴力、性的虐待、親からの無関心など、さまざまな問題にさらされながら、家族ではない人間との出会いのなかで、子どもたちは人間らしさを発揮し、新しい生活を歩み始めていく。その道筋を克明に追ったNHKテレビのスペシャル番組「子ども・輝けいのち」の第一集「父ちゃん母ちゃん、生きるんや 大阪・西成こどもの里」（2003年2月放映）は、多くの人たちの感動をよんだ。自分の存在感が確認できて、居場所があり、支えてくれる人がいれば、どんな子どもでも本来ある自分の力が発揮できると再確認させられたからに違いない。

子どもたちとの出会いで転職

そのミニ児童館「こどもの里」は、今から25年前にフランシスコ会が大阪・西成地区にある「ふるさとの家」に設けた「こどもの広場」が始まりである。その後、守護の天使の姉妹修道会を経て、4年前に大阪大司教区が運営を引き継いだ。施設長の荘保共子さんは22歳の時に釜ヶ崎を訪れ、「子どもたちの瞳の輝きに魅せられて」と転職。創設時代から子どもたちとかわって来た人である。

訪れたのは夏休み中だったので、子どもたちで大にぎわい。耳の不自由なAちゃん。大きな体でピョンピョン飛び上がる自閉症のB君など、障がいを持った子どもたちが次から次と2階の食堂に入ってくる。荘保さんは慣れたもの。子どもたちのするがままにさせている。

「ここに来て、たくさんの子どもたちと出会って、自分の生き方、考え方がコロッとひっくり返されました。それまで培われた価値観、例えば子どもは学校に行かねばならないといったことがいかに偏見に満ちたものだったかを教えられました。子どもたちとの出会いが、い

つも“生きる”という原点に私を立ち戻らせてくれるのです」

バブル崩壊後の釜ヶ崎は悲惨だ。仕事がない。段ボールやアルミ缶を集めても、簡易宿泊所の泊まり代にもならず、テントや段ボールの箱暮らしをする人も多い。子どもたちの生活は想像を絶する。

「子どもが生活費の工面をさせられているの。小学3年の子が片道切符代を持たされて、15キロ離れた所に金策に行かされたけど、どうしても言い出せず、線路伝いに歩いて帰ってきたこともあります」

追い詰められた親たちからさまざまな虐待を受けた子どもたちが、少しづつ心を開き、語り始める。

「4歳の子が『ここから飛んだら死ぬ？』って聞くんですよ。父親から虐待を受けているけど、父親だから逃げられません。結局、子どもは自分が悪いからだ、と自分の存在までも否定してしまう」

それでも私のお母ちゃんや

莊保さんにとって今でも思い出すと胸が苦しくなる体験がある。

「小学生の頃から家出を繰り返していたC子とD子が、中学を卒業して、ここで生活していたある日、ものすごい勢いで1時間くらい泣いたんです。その後、『大人は汚い』『自分の体を元に戻して欲しい』ってC子が訴えました。小学生のころから売春をさせられていたんです。『助けて』って叫んだのに、隣の部屋にいる母親は助けてくれなかったって…。最後に、『それでも私のお母ちゃんや』と、泣き崩れたのには衝撃を受けました。D子も実父から性的虐待を受けていた。15歳を過ぎて、初めて家出の理由を私に明かしてくれたんです。そんなことも知らず、家出したら探して家に連れ帰っていた私は、いったい何をしてきたんだと思いましたね。子どもたちは、他人に言えないことをいっぱい持っています。与えられた環境のなかで精一杯生きてるんです」

そんなどうすることもできない子どもたちの怒りや寂しさを莊保さんは受け入れ、ただただ涙を流して、共感するしかない。

「ここには今、5人の子どもたちが寝泊まりしています。親が仕事にあぶれて食事が取れない状況だったり、父親や母親にかまってもらえず、よりどころを失った子どもたちもいます。そのほか遊びに来る子どもたちは1日あたり30人ぐらいいますね」

教区の職員2人、1年間ボランティア1人、アルバイト2人、それにボランティア数人でまかなっている。

「でもね、この街はどの街より温ったかい街なんです。どんな格好しようと、サラ金に追われていようと、刑務所出であろうと、外国人であろうと、みんな、ありのままの存在を受け入れています。お互いに過去を聞かないしね。ここでは子どもたちが少々脱線しても、とやかく言いません。この街全体が、自分たちの力で生きなきゃという思いで成り立っているんですね」

野宿をする大人たちの心を開く

こどもの里では、子どもたちと体験学習を20年近く続けている。野宿をする大人たちに対する理解を深めることで生命の大切さを知り、子どもたち自身が自分の生命、自分の将来や生き方を思いめぐらすきっかけになれば、と始めたのだ。

「1983年に横浜で少年たちが野宿労働者の男性3人を集団暴行して殺害した事件が起きましたね。3年後の86年に大阪市が実施した釜ヶ崎の子ども実態調査で、その事件について聞いてみたら、自分たちも石を投げたり、つばをかけて、『ばかやろう』と言ったりしていた事実が分かってきた。これではいけないと、スタッフが、野宿労働者の人たちと直接話をする機会をつくろうと始めたんです」

厳寒期の2か月間、毎週土曜日の夜。子どもたちはスタッフと一緒に街を回り、毛布やお握りを媒介に、野宿労働者たちと話をする。

「すごいですよ。つらい境遇で口を閉じていた人たちの心を開く力を子どもたちは持っているんです。大人たちが何度声をかけても一言も話さなかった人が、子どものたった一言、『こんばんわ』に、ちゃ

んと応えているんです」

NHKのドキュメンタリーに登場したE君もすごい。

E君は5人家族。父親と死別した後、フィリピン人の母親はお酒を飲んで暴れるようになり、入院した。そのためE君はこどもの里で、弟と妹は養護施設でと、家族が離散してしまう。やがて母親の状態が少し安定したので、母親と一緒に生活するためE君はこどもの里を出てアパートで生活を始める。高校へ通いながら、母親のために食事を作ったりもする。母親も落ち着いてきたので、今度は弟と妹も引き取って、母子5人暮らしの生活が始まった。

取材者に「母親をどう思うか」と質問され、E君が「大切な人」と答える場面は、子どもの持つ力のすごさを教えてくれる。

とにかく子どもはすごい

「とにかく子どもはすごい。人を無条件に許す力、そして親たちに生きようとする気力を取り戻させる力を持っています。今、日本は豊かです。豊かさは心を使わず、金を使います。子どものためと言って親がいろいろ準備しすぎちゃうため、子どもたちは自分で考えることをしなくなり、だんだん強さや力が消されてしまっているように思います。やりたいことがあっても、『そんなことしたって仕様がなくてしょ』と止められる。失敗しないようにいつも答えが先に出てくるので、考えることをしなくなりますね」

自分の居場所を見つけた子どもたちは、こどもの里でたわむれ、歓声をあげたりして、飛び回っている。

「この子たちは、親がかまってやれない、やらない状態だから、ほったらかしにされる。例えば親は、もらった生活費をパチンコですってしてしまう。そのため子どもたちは、今日のご飯をどうしたらよいかというところから考えなきゃならない。心を動かしているんです。整えられていない、ハングリーだということが、子どもが持っている力を発揮させるんです」

おれの父ちゃん、すごいだろう

親による子どもへの虐待、そして死亡させる事件が相次いでいる。虐待はなぜ起こるのか。「やめたくてもやめられない」という嗜癪（しへき）で、アルコールや薬物依存症と同じ暴力に依存する「病気」（アディクション）だと言う人もいる。親から子ども、孫へと連鎖する、その連鎖を断ち切るのが私たちの課題だと説く精神科医もいる。

ここに登場していただく村本潔さん（38）＝仮名＝は、幼少期からアルコール依存症の父親の虐待にあい、学校ではいじめられ、その後遺症から青年期には出勤拒否状態になり、精神科のクリニックへ通った。今は、心に傷がある自分をありのまま受け入れられるまでに回復した。自分の体験から「子育ての親を孤立させてはいけない」と考え、地域で野球教室を開いたりして、親と子の居場所づくりに励む。

酒を飲むと急変して暴力

今から20年近く前。保育園にアルバイトで入った彼は、どんな要求をも笑顔で受け入れる好青年だった。その後、職場結婚。地方の保育園に転職し、何の不自由もない生活を送っていた。ところが10年前体調をくずし、仕事を続けられなくなり、やめた。

彼が父親から幼児期に受けた虐待による心の傷がそうさせたのだった。

「酒を飲んでる親父が怖いんです。別人になってしまい、いつスイッチが切り替わって、母親を殴るかどうかが気になります。僕も殴られました。僕は親父に似ていて、しゃくにさわるらしい」

陽気な菓子職人の父親は、ストレスをためるためか、酒を飲むと急変して暴力を振るった。店が倒産してから、一層激しくなった。

「結婚したときは5、60キロあった母が35キロに激やせし、血のおしっこが出る生活になったんです。そんな母が、ある日、甘えたがる私を2階に連れていき、初めて添い寝をして本を読んでもらった。ところが疲れているからそのまま寝てしまった。そこへぶち切れた親父が上がってきて、『何やってるんだあ』と、母を思い切り蹴りあげた。僕はぼうぜんと見ていたそうです。3、4歳らしいです」

いじめが永遠に続くと思うと…

小学3、4年のころ。家は4畳半と3畳2間の市営住宅。夜になると、4畳半の間で酔った父親が母親にば声を浴びせる。

「隣の部屋で兄と2人で寝ていると、殺し合いが始まるんじゃないかと思うほど、父は母を罵倒する。もう心臓が口から出て、吐きたくなるほど怖くて寝られない。自分が殴られるより嫌だったですね」

そのころから学校ではいじめが始まった。図書室で裸にされたり、トイレに閉じ込められ、ホースで水をかけられた。5、6年生になると、いじめは陰湿になってくる。給食に髪の毛が入れられ、給食当番で配った食事にはクラス全員がそっぽを向き、ごみ箱に捨てられた。

「顔も洗わないし、服装は汚れ、忘れものはする。勉強はできない。子どもは残酷だから、そんな私をいじめの血祭りにあげるんです」

体に異変が生じた。夜中に胃けいれんや顔面硬直などの発作が起きる。下痢が止まらず病院に入院。病院から学校へ通ったこともある。

6年の時の女性担任教師は、そんな彼を黒板の前に座らせ、「どうして村本君をいじめるの会」という会を開く。クラス全員に発言させた。「くさいから嫌い」「頭が悪い」「うそをつく」「気持ちが悪い」といった声が続々に出される。

「担任は『お前にも問題があるのよ』と言いたかったんですね。学校の帰り道、こうしたいじめが永遠に続くんだ、という暗たんたる気持ちで、自殺という言葉は出なかったけれど、(人生が)終わりになれば良いと思ってました」

父親からの虐待、学校でのいじめに耐えながら、中学、高校へ。

「夜、眠れない」「突然、死にたくなる」「あの人が気になってたまらない」といった不安感、そして突然襲ってくる夜尿…。そんな時、相談相手になってくれたのが、教会の3、40代の信徒だった。

「当時、教会にはカトリックらしくない、枠から外れてる人たちがいて、私が夜中に突然電話して、『怖い』とか訴えると、『変じゃない、あなたは。そのまんまでいいの』って、話を聞いてくれたんです。あんなふうによく受け止めてくれたと思いますよ。助かりました」

成長するためにはモデルが必要

保育園での職場結婚。長男誕生。転職。そして出勤拒否に陥り、退職。1年間引きこもり状態となり、精神科の斎藤クリニックへ。

「なんとか10年近く、だましだまし、ボロが出ないように必死でほころびを繕うような努力をしてきたんですが、新しい職場に行ったら精神的におかしくなった。すべて怖くてしょうがない。日毎に恐怖がつのおつていく。夜も眠れなくなり、クリニックに行きました」

幼少期の苦い体験から、妻には仕事をやめさせ、専業主婦として子育てに専念してもらったが、その時から役割分担が逆転した。

「クリニックにかかって、どんどん落ち込んでいくので、働きに出た妻は家に帰ってくると、『クビくくっているのではないか』と、心配していたと言うんです。こんなはずじゃなかったと、すべてスッカラピンになった気分でしたね。でも回復したのは、そんな自分を心の底から支えてくれた妻のおかげです」

斎藤学先生に話を聞いてもらうだけでなく、同じ問題を抱えた人たちのグループミーティングなどにも出て、他人の体験に耳を傾けた。

「斎藤先生から、『どうやって両親は、けんかをおさめていくの』と聞かれたけれど、記憶が切れちゃってる。狭い家だから、見ているはずですよ。でも恐怖心からか記憶にない。人が信頼できるとか安全だというのは、人との関係を見て、紡（つむ）いでいくんだけれど、

私の家庭は、そういうのを紡いでいく場ではなかったんです」

2年ほどクリニックに通っているうちに、もっと自分のボロや弱さをさらけ出してもよかったのではないか、だれも自分に期待してははいないのだという実感を持つことができるようになってきた。

「人間が成長するには、ほどほどのモデルがないと、逆に逆に理想化してしまったり、かくあるべしみたいなものを自分に課してしまう。失敗を許さない完璧主義を目指すから、苦しくなって、何もできなくなる。灰色でいいやではなく、白黒をはっきりさせる極端な世界に入っていく。児童虐待を受けた人間は、生き残って大人になってからどう生きていくか、人間関係で苦勞するケースが多いんです」

自分を変えようと思わなくなった

妻に代わって子どもの世話や家事を始める。休日、小学校の校庭で保育園に通う息子とキャッチボールを始めたら、通りがかった子どもが「何やってんの」と参加してきた。「おれんちの父ちゃん、すごだろう」。5人、6人と増え、やがて父親も顔を見せ始める。

「それがきっかけで息子が小学生になったら、地域のサッカークラブにも入り、試合を見に行くと、父ちゃんたちは腕組んでるだけで何もしゃべらない。でもだんだん父ちゃん、母ちゃんグループができてきて、試合の後、『みんなで飲みに行こうよ』ということになってきた。話すうちに、男たちの暴力、それが原因での離婚で、意外とシングルマザーが多いことがわかってきました」

今、村本さんはスポーツを通じて知り合った父親、母親たちとのかかわりを大切にしながら、相談相手にもなっている。苦しみを受け止める土壤があると皆が感じるのだろう。

「今も自分は変わったとは思っていません。悩みもなくなったわけではない。ただ自分を変えようと考えなくなったのかもしれない」

3 長崎「モナの会」

障がい児と親たちに理解と協力を

長崎の被爆中心地が前方に広がる高台にある城山カトリック教会。そこで毎月1回、自閉症、知的障がいなどを持った子どもを抱えた母親たちが集まってくる。聖書の分かち合いをはじめ、日頃の悩みを打ち明けたり、励まし合い、生きる力をもらって帰路につく。

参加する母親たちはいつも7人前後。それぞれ所属の教会は違う。しかも司祭の主導ではなく、所属する教会の枠を越え、障がい児を抱えた母親たち自らが自主的に集まり、互いに支え合う「自助グループ」的な活動は、画期的なことである。

肩身の狭い思いが

「モナの会」が発足したのは今から13年前。かつて重症心身障がい児施設で働き、在宅の知的障がい者の親子相談にのっていた松尾真理さん（51）は、「こんなに悩んでいる人が多くいるのに、私たち教会の共同体はいったい何をしているのだろう」と、胸を痛めていた。そんな時、長崎市内に住む川原由美子さん（48）に出会った。

川原さんの長男、委行（ともゆき）君（19）は、妊娠中の風疹で、聴力障がいなどで入退院を繰り返す。一家は障がい児に理解ある保育園に入園させるため転居するなど、努力を重ねていた。

「私が日頃考えていた事を由美子さんに話したら、『じゃあ、私たちが会を立ち上げたら』となったんです。モナ（MONAD）というのはギリシャ語で、1つという意味です。『障がいのある人もない人も一人ひとり尊厳を持った大切な存在である』ことを訴える会にふさわしい名だと考えました。だれもが障がいを持ったわが子と向き合うとき、療育、就学、就職自立、そして親の死後の問題など、さまざまな問題

に直面する。そんなとき互いに支え合いながら、障がいを持った子の善さが最高に生かされる教会共同体や地域社会づくりに参加しているというのがモナの会の趣旨なんです」

アウグスチノ修道会の城山教会が、月1回集まる場所を提供してくれた。障がい児を抱え、肩身の狭い思いをしていた親たちは、教会共同体のなかで初めて自分たちの居場所を与えられたという実感を持った。メンバーが集まると、互いに自分たちの抱える問題を語り合う。

気の休まる時がない

A子さんは、子ども4人のうち二男（17）が重度の自閉症だ。

「A子さんは二男をカトリックの幼稚園に通わせましたが、初聖体を受ける寸前に、『B君は初聖体を受けられません』と言われたそうです。B君がしゃべれず、理解力が劣っているからだ。A子さんは、『教会が、そんななんて！ 偏見の多い一般社会と同じじゃないか!!』と怒り、一時、教会から遠ざかっていました。弟が兄思いで、いつも世話をしていました。ところが中学に入ったら、兄が情緒障がい児学級にいることがわかり、ばかにされ、いじめられた。そのために弟は自律神経失調症で不登校になってしまったんです」

発足当時は、比較的軽い障がいを持った子の母親たちが多かったが、最近では、自閉症など手のかかる子を持つ親たちが増えている。

C子さんの小学5年になるD君も、重度の自閉症だ。言語もわずか数語で、多動徘徊という行動をとる。目を放したすきに家を飛び出し、自宅から10キロ先で保護されたことも度々ある。最近では、GPS端末機を身につけたので、すぐに居場所がわかる。しかしその器具を外してしまうこともあるので、気の休まる時はない。

「そんな彼女には、車で2時間半も離れた所にある実家に、病気や高齢のため世話が必要な叔母と母親と祖母がいます。数か月前には父親がガンで亡くなりました。だからこの夏は介護に大変でした。フラフラになりながら、点滴を打って頑張っていました。そのC子さんは言

うんです。『モナの会を続ける必要がある。それは自分の子どものためでなく、これから生まれてくる障がいを持った子たちのためにも、一歩先を歩んでいる私たちは道をつくっていかなければならないの』と。モナの会のお母さんたちは、みな、この気持ちが強いんです」

E子さんの長女（18）は、重度の知的障がいを持つ。

「E子さんが語ったことが忘れられません。『障がい児がいると言ったとたん、周りの人の態度がコロッと変わるの。だから、できるだけ知られんようにしているの』と。そんな人たちは無視すればいいよ。障がい児が表に出ないから、みんなも実情を知ることができないし、偏見も解消されないよ、と言うと、『世の中、そんな甘いもんじゃない。すごいよ人間って』と、言い返されたこともあります」

手を貸してくれる人がいたら

モナの会では、夏休みになると、障がいがあるため行き場のない子どもたちのために「夏の集い」を、また父親に育児や活動に参加してもらおうと「バーベキュー大会」を開催したりした。しかし準備や後片付けなどが大変で、数回開いただけでなかなか続かない。

「バザーや行事を開くことで少しずつ仲間の輪が広がってきましたが、障がい児を抱えたお母さんたちには無理がきて、会をやめていく人も出てきました。知的障がいを持つ親は、子どもから目が離せず、また離せられないのです。そんな時、信徒の人たちが手を貸してくれると助かるのですが、ボランティア参加は、ほとんどありません」

しかし3年前から少し雰囲気が変わってきた。長崎大司教区に福祉ネットワークができ、また福祉委員会も発足、モナの会は障がい者支援団体の一つとなった。また浦上教会では月1回、知的障がい児のために『こひつじクラス』と呼ぶ教会学校が開かれた。神父やシスターも協力を惜しまない。

「知的障がいを持った子に対しては『教会学校に来てはいけない』とは言われませんが、動き回ったりするのでお母さんのほうから遠慮

してしまいます。障がいのある子でも気兼ねなく行け、教会の雰囲気
を体で覚えてほしいと願い、立ち上げたのがこひつじクラスです。そ
の子たちも養護学校を卒業していくので、お母さんたちのなかには教
会内に知的障がい者のための作業所があったらと願う人もいます」

生まれてきてよかった

メンバーたちの思いを代弁する松尾さんも、苦しい思いをしたこと
がある。モナの会をやめたFさんは、長女が重症心身障がい児だった。
そのFさんが松尾さんにこんな言葉をぶつけて退会していった。

「松尾さんは障がい児を持つという大変さを全くわかっていない。
1度、『ひまわりの園』（重症心身障がい児の通園施設）に行ったらいい。
そこで見てきてください」と。

「その言葉を聞いて私はとてもつらかった。大学で福祉を専攻し、
重症心身障がい児施設で働いていたこともあったので、『障がい児の
ことはよく分かっている』と、どこかに自負心があったからです。最
初は憤りもありましたが、だれも言ってくれないことを彼女だから言
ってくれたのだと。それは彼女の叫びだったと思うし、モナの会を続
けていく時、忘れてはいけない言葉だと自分に言い聞かせています」

モナの会が発足した時、小学2年だった川原委行君は今は19歳。長
崎県立ろう学校高等部専攻科3年である。その彼が2003年度長崎県美
術展覧会工芸部門に「冬の訪れ」と題した花器を出品、最高賞の知事
賞を受賞した。就職難の時代に就職先も内定している。

「風疹で障がいのある子が生まれると医師から言われた時、川原さ
ん夫婦は『神様のご計画だから』と、神様に委ねようと『委行』とい
う名に決めたそうです。親類、周囲の人から『頑張れ、お祈りしてる
よ』と励まされたけれど、なかには『生むのは親のエゴだ』と言う人
もいた。最近、そうした状況を委行さんに説明したら、『生まれてき
てよかった。生むのを応援してくれた人がたくさんいて、うれしい』
と答えてくれたと、由美子さんは感動していました」

4 「オリーブの会」

こんなに心もからだも楽になれた

統合失調症や躁うつ病など、心の病気を抱える人たちにとって、教会は居心地のよい居場所になっているだろうか。実態を知らないため、どう対応したらよいか戸惑い、無視されたり、冷たい視線を投げかけられた障がい者は少なくない。3年前、カトリック教会にも精神障がい者の自助グループである「オリーブの会」が設立された。メンバーは少ない時は5人程度だが、定期的に集まって自分たちの抱える問題を話し合い、2003年10月には精神障がい者のための黙想会も開いた。「心の病気に理解を深めてもらえるなら」と、メンバーの一人である洋子さん（34）＝仮名＝は、取材に応じてくれた。

坂道を転がるように

洋子さんの異変に母親が気づいたのは高校1年、16歳の時だ。

「学校に行く時間になると脂汗が流れるほどのひどい腹痛に襲われ、学校を休むと不思議に昼ごろにはウソのように痛みが消えるんです。そういう日が続いて、とうとう学校に行けなくなった。でも当時は自分が病気だと認めることは、私にはできませんでした」

高校を中退。アルバイトや大検受験のための勉強をしたが、いずれも長続きしなかった。

「人恋しい、ボーイフレンドが欲しいという思いがいっぱい、どこに行きたいということにはなかったんですが、時にはただただ遠くまで電車に乗って、そして帰れなくなったり、自分から危ない目にあうことをしていました。だんだん人には言えないほど放蕩の限りを尽くすようになり、坂道を転がり落ちるように落ちていったんです」

そんな洋子さんを抱え、途方に暮れる家族はどうしてよいかわから

ず、苦しい日々を過ごしていた。

「どうしてこうなったのか分からず、私にとって一番つらいときでした。だれかに助けてもらいたいんですが、助けてもらうのも腹が立つ。そのくせ堕落した生活は幼な友達には見せたくないという思いから、友達とは会わず、引きこもる日が多くなっていきました。しかし『今に見ている、私はもっと偉くなるんだ』という自負心と夢だけはありましたね」

大学を2年で中退

ある日、いつも聞き流していた「何も言わないけど、教会にだけは行きなさい」という母親の言葉に心が動き、「うるさいなあ」「何か意味があるのかなあ」と思いながらも、教会に通い始めた。母親がクリスチャンだったため、子どものころに兄弟3人で教会に通っていた。

「もうすぐ20歳を迎えるという2月、ふと『ああ、私にはもう何も残っていない』という思いにかられたんです。そう思った時、年齢に関係なく受け入れてくれる定時制高校を思い出し、その足で願書を取りに行きました。あと数日で入試という日でした。何もかもが不思議な神のあわれみとしか言いようがないんですが、合格しました」

そのころだ。洋子さんは自分で自分のしている行動が変だと思うようになり、精神病のクリニックを訪ねた。「軽い鬱病だからすぐに治ります」と言われ、薬を飲みながら通学した。

「大量の薬の副作用もあって苦しんだんですが、体も気持ちもかなり楽になりました。そのころは半病人でも仕事はあったし、勉強もでき、体力もあって、同級生より年上だったので生徒会の副会長をしたり…。今まで会いたくなかった幼な友達にも自分から連絡して会い、放浪や徘徊もピタッと治まり、自分の力ではない何かに守られている感じがして、自分にとっては本当に充実した4年間だったんです」

大学に推薦で入学したものの、間もなく再発。通学拒否状態になり、大学2年の時に自主退学した。

「学力がついていけなかったことと、病気がすっきりしなかったからです。大学の保健室で相談しても親身に受け止めてもらえず、他に相談する人もいなかった。友達は『もっと大学生活を楽しめばいいのに』と言ってくれましたが、変えられない自分がつらく、また薬で生じる眠気とのたたかいてもつらかったんです」

自助グループに出合って夢と希望が

最初の入院は28歳の時。精神科医から「統合失調症」と診断された。7か月の長期入院だった。

「入院生活はすごいカルチャーショックで、泣いたり怒ったり、キレたこともありましたが、結果的に入院してよかったと思います」

入院中のある日、母親が洋子さんを教会に連れていってくれた。

「その時の神父さんの優しさを忘れることはできません。『大丈夫よ。大丈夫』と言いながら、ほおや肩や背中に優しく手を当てて励ましてくれたんです。どうしてこんなに優しくされるのかショックを受けました。それまでは教会のなかでさえ、病気を悪いことのように見られている気がしたし、聖書のなかの悪霊にとりつかれた話は、名指しで私のことを言われているようでつらかったんです」

4年前、洗礼を受けた。その後、再入院したが、今では週3回のデイケアに通い、2週間に1回通院する毎日だ。

「毎日、薬を飲みます。薬が合うまで、いろいろ混乱もありましたが、最近ようやく落ち着きました。これまでは、こうしてはダメ、それはできない、やりたいけど受け皿がないということばかりでしたが、今、私には夢と希望があります。いろいろなことに興味も出てきて、それを自分で選択できるんです。自助グループのおかげです」

精神障がいを持っている当事者同士の集まりである「オリーブの会」とは3年前に出合った。

「ミーティングでは皆が堂々と『私は精神障がいの当事者です』と言えるんです。教会では言えないことでした。自分をそのまま受け入

れてくれる場所があることが、どんなに素晴らしいことか。苦しんでいるのは私だけではない、同じ苦しみを抱えている仲間がここにいるのだと思えるんです」

自分の無力を受け入れて

参加する人々は、互いの苦しみや痛みを語り、理解し、共有する。自分が無力であることを受け入れ、共感、共鳴することによって心は癒されていく。精神障がいを持っているがゆえの孤独感、置き去られ感という心の部分の解決を通して、本来の病気からくる症状が軽くなり、癒されていく。

「オリーブの会では、私よりも年上の仲間が楽に生きている姿を見ることができるんです。『年を取ると苦しくなるのではなく、楽になるのだよ』という希望を感じるんです。病気や障がいを持ってない人は、年を取ると何もできなくなり、人の世話になって生きることは苦痛のようですが、私たちは『できなくて当たり前』の世界に生きています。だから何かできると、とてもうれしいんです。年を取って体は衰えても、心は自由になる気がするんです。私は、いま、心も体もこんなに楽になれたのは、このオリーブの会のおかげだと思っています」

自分だけの力では勝つことができなくても、当事者同士が支え合い、助け合うことによって、自分を越えた力を通して立ち上がる力をつけ、メンバーたちは勇気づけられていく。

最近、当事者を抱えた家族の定例会も開かれるようになった。

「オリーブの会の活動を支えてくれる神父さんもいます。『人は何もできなくなり、自分の無力さを受け入れて初めて、神様の力に自分を委ねていけるようになるんだよ。そして無力になるということは、神様の愛し子に帰ることなんだよ』という神父さんの言葉が忘れられません」と、洋子さんは話を結ぶのだった。

(注) オリーブの会連絡先

東京都八王子市明神町 1-8-13-207 中原方 力障連気付

本当の自分を認め、生きる勇気を持たた

教育改革で「ゆとり教育」が導入されたにもかかわらず、不登校・登校拒否は増え続け、14万人近くに達している。小学校では280人に1人、中学では40人に1人の生徒たちが、学ぶことを拒否している計算になる。保健室登校や、休みたくても休めない生徒たちの数を入れると、この数倍にもふくれあがると言われている。

学ぶことが楽しいはずの学校が生徒たちを苦しめている現実とは異常だ。常に競争と比較のなかで、試験の点数が絶対的な価値を持つ日本の学校。教育基本法にうたわれている「人格の完成を目指す」教育が置き去りにされているのだ。そんな学校教育に疑問を抱いて、不登校に苦しむ生徒たちに寄り添い、「人間教育」に人生をかけている梅澤秀明（49）、良子さん夫妻（京都教区西舞鶴教会）を舞鶴に訪ねた。

教師のささやかな抵抗

JR舞鶴駅から車で15分。城下町の風情を残す静かな町の外れに「聖母の小さな学校」があった。高齢化で縮小を余儀なくされた聖母訪問会の修院跡を借りて15年前から始めた不登校児のための学校だ。

現在、中、高生11人が在籍。午前9時半から3時まで、一つの部屋でみんなが学び合う。だが時間割りは一人ひとり違う。週1回、3日に1度、来ても30分で帰る生徒もいる。既に60人近くの卒業生を出し、そのうち9割が高校に進学した。

二人は聖母訪問会が経営する宮津市の旧暁星女子高校の教師だったが、結婚を機に退職して上京。秀明さんは私立星美学園高校の社会科教師に、良子さんは埼玉県立上尾高校で国語の教師となった。

「当時、登校拒否という言葉で、学校や社会からだけでなく、最も

愛されたい親からも理解されない生徒たちを抱え、彼らのために何をすればよいのか悩み、心を痛めていました」

川口市の公民館に開設した難民のための週2回の夜間識字学級に携わっている時、不登校の生徒たちが「夜なら家から出られる」と30人も集まってくる現実に教師として胸が痛んだ。

「昼間は、ただ彼らが登校してくるのを待つだけという教師の役割の矛盾に悩み、教育のあり方を常に考えさせられていました」

そんな時、第2バチカン公会議の教会刷新を受けて、日本の教会が打ち出した「小さな人々と共にすべての人を大切にし、社会と共に歩むキリスト者」という方向性が、二人を勇気づけた。

「そうだ、『小さな人々』とは、不登校の生徒たちなんだと気付かされたんです。経済至上主義の現代社会と、理念だけの形骸化したカトリック教育への私たちのささやかな抵抗でもありました」

生徒に寄り添い、信頼関係を

不登校児が来やすい場をつくるために5年間にわたって、さまざまな実践を全国各地に見て回った。なかでも一番感銘を受けたのは山形にあるプロテスタント無教会派の「キリスト教独立学園」だった。

「先生方の教育への挺身の姿勢や見識の高さ、情熱の深さはまさに私たちの模範となるものでした。すき間風の入る校舎、質素な寄宿舎の食事と、徹底した清貧の環境のなかで、生徒たちが自らの本心でいきいきと生活する様子にも深い感動を覚えました」

周囲の反対を押し切って15年前、二人とも退職。かつて勤めた女子校の経営母体である聖母訪問会が、二人の熱意に動かされて土地建物を提供してくれた。聖母の小さな学校は1988年、開設された。

「この学校の教育理念は人間教育です。特に中学生の場合、不登校はその困難さを通して人間について学んでいける大切な時なんです。単に不登校を乗り越えるだけでなく、不登校を礎にして人間的に成長し、希望を持って人生を生きていってほしいと願っています」

「学校に行けないダメな私」「最低な私」と自己嫌悪に陥り、人間不信から心を閉ざしている生徒たちに二人は寄り添い、コミュニケーションをとることで、ゆっくりとていねいに信頼関係を築いていく。生徒が在籍する公立学校の教師たちの協力も大きな力になっている。

「公立学校の先生たちは土曜日を使って教えに来てくださいます。『私を見てくれている人がいる』『この先生は他の先生とは違う』と、先生に対する認識を改め、信頼関係を培うことで、生徒たちは少しずつ自信をつけ、希望を抱いていきます」

人権教育から夜回りボランティアに

さまざまな行事のなかで、生徒が心身ともに成長するユニークな取り組みとして最も力を入れているのが、2学期の「スポーツフェスタ」（体育祭）だ。生徒たちが競技に参加するだけではない。この学校で学んでいくテーマを自分たちで考え、決めなければならない。

「生徒たちは、『だれも信じられない』『本当の気持ちが出せない』『人と一緒にいると傷つく』といった硬い殻に閉じこもっています。それを破って自分とグイグイ向き合い、話し合い、本心に気付いていくことは生徒たちにとって実に苦しい作業になります」

生徒たちの口から絞り出される言葉の一つひとつに、梅澤先生夫妻は共感し、確認していく。何日も何日も、その繰り返しのなかから、彼らの共通の思いが言葉となって、テーマが見えてくる。

スポーツフェスタの当日、挨拶に立った生徒は、原籍校の先生、卒業生、保護者など70人を前に、「学校に行けなくなって家にいたころ、これから先どうなるんだろうと考えると苦しくて苦しくて仕方がなかった。学校に行けないということは、自分の将来もないに等しいと思えました。死んでしまいたいと思うような気持ちになっていました」とあいさつした。

生徒は読み上げるうちに、身につまされて泣き出してしまった。

人権教育も実にユニークだ。単に「人は差別されてはならない」に

留めず、「すべての人は尊敬されなければならない」と、人間の尊厳に対する認識を深めていく。しかも知識だけに終わらせず、野宿の労働者たちへの夜回りボランティアという体験学習にまで発展させた。

「きっかけは公立の先生がある時、外国の戦争や飢餓で苦しむ子どもの写真を見せて『君たち、これを見て関係ないと言えるかな』という宿題を出して帰ったんです」

小学校時代に不登校になった生徒が次のように書いてきた。「自分には関係がないことで終わってしまえば、その人たちは苦しみ続けることになる。自分さえよければいい、関係のない人はどうでもいいと思うのではなく、こちらから関係を持てばいい。弱い人は自分から声を上げることはできないのだ。その人たちの声をほくが代わりにあげなければならない」

この作文をめぐって話し合いが続けられ、見学会の帰りに野宿の労働者を見かけたことがきっかけで、夜回りボランティアに発展していった。今では親子で『京都市夜回りの会』に参加するまでになった。

「その生徒はここに来て4年になります。人を大切にする人間観をつかんでくれていたのかと本当にうれしく思いました」

不登校は私の人生の原点

生徒たちの手作り文集に、中学1年から不登校で、今は大学生となった卒業生の一人が「私の原点」と題して、次のように書いている。

「不登校の思い出は色あせるどころか、今もなお私のなかで生き続けている。苦しく過酷であったことには違いないが、この不登校を生き抜いたことは私の人生の原点を築くのに私にとって絶対的に不可欠だった。他の人から見れば、私の不登校の思い出など単なる汚点かもしれない、人生の遠回りな経験かもしれない。もしあの時、不登校が私を捕まえてくれなかったら、今の私は存在しないだろう。不登校を生き抜いたからこそ獲得することのできたものがたくさんある。不登校の自分から卒業して5年たつ今、その思いは強くなるばかりである」

南北코리아と日本を結ぶ架け橋に

2002年9月17日。日朝国交樹立を目指して開かれた日朝首脳会談は、拉致事件の事実の前に何も成果をあげることができないでいる。あまりにも悲惨な現実には世論は厳しく反応し、北朝鮮についての報道やテレビ番組が多量に流され続けている。拉致された5人は、家族と再会できたものの、今度は子どもと一緒に生活するという最も基本的な人間の権利が侵害される事態に追い込まれ、新たな苦しみを抱え込むことになった。

それだけではない。日本には朝鮮学校が118校あり、日本で生まれ、朝鮮学校に通いながら生活している在日コリアンの子どもたちが1万4000人いる。そのなかには、制服のチマチョゴリを心ない日本人に切られたり、冷たい眼差しを向けられたりして、心に傷を受けた子どもたちもいる。過去の歴史に何も関係ない一番弱い子どもたちの人権が、いじめや脅しによって脅かされてよいものだろうか。

北朝鮮報道に傷つく子どもたち

2児の母親でもある東京・朝鮮第5初中級学校の金聖蘭先生を訪ね、執拗なマスコミの北朝鮮報道に深く傷ついている子どもたちの思いを代弁してもらった。

「共和国が拉致を認めた報道に耳を疑いました。信じていた祖国への気持ちが崩れ、これまで学校や家庭で大切に育ててきた朝鮮人としてのアイデンティティまでもがぐらついてしまったのです。追い打ちをかけるように子どもたちへの脅しや嫌がらせが続きました。子どもたちは心にひどい傷を受けています。在日として生きていくことを受け止められない気持ちにさえなっている子もいます」

今回の北朝鮮についての報道が、子どもたちにどのような影響を与えているのだろうか。金先生が子どもたちに書いてもらったアンケートには、日本人への不信感をつのらせる思いがにじみ出ている。

「大好きなチマチョゴリを着て学校へ行けなくなりました。電車の中でも試験勉強ができません。なぜかという、プリントやノートには全部朝鮮語で書いているので」「私服を着ていても、朝鮮人と見抜かれている気がします。それと北朝鮮が自分と関係ない異国のような感じがします。仲の良い日本の友達も心の中では『朝鮮人は怖い』と思っていそうな気がします」…。

これからも日本で共に生きていきたい

「拉致事件、不審船、核問題に対する共和国の対応に色々な批判があるのは当然だと思います。恐らく在日朝鮮人で、それを良いことと言う人はだれもいません。でも北朝鮮のすべてを否定し、嘲笑の対象にする報道の仕方はやめてもらいたい。在日の人々が見たり読んだりするのは。しかもその人たちの多くは日本の植民地支配のなか、強制連行されたりしてきた人たちだということを認識してほしいのです」

金先生は在日2世である。日本で生まれ、日本の子どもたちと同じ本やマンガを読み、同じテレビの番組を楽しみながら成長してきた。その点では在日コリアンと日本人が一番近い隣人である。にもかかわらず差別や偏見により、遠く隔てられてきたのが現実である。

「制服のチマチョゴリの着用を一時やめ、第2制服のブレザーとスカートで通学するようになりました。これまでも何かある度に学校に嫌がらせの電話があったりしましたが、今回は本当にひどいです」

私たちが人間らしく生きるうえで大切にしてきた思いやり、優しさは、いったいどこへいつってしまったのだろう。競争社会のなかで他人から受けた虐待、暴力、いじめを、今度は自分より弱いものに向けて返すことでしか生きられないとしたら、実に嘆かわしいことである。

「私たちは朝鮮人ですから祖国を愛しています。しかし日本の社会のなかに生まれ、育ってきました。だから、この日本も大好きなのです。日本の地でこれからも共に生きていきたい。そのためには地域の人々と互いに理解し認め合っていかなければならないと考えます」

「在日とは・民族とは」=生徒たちの絵から

「2002年9月、国交正常化に期待を寄せて中学2年生の美術の授業で『在日とは・民族とは』のテーマで絵を描き始めましたが、北朝鮮が拉致を認めた9月17日から起きた北朝鮮バッシング報道については特に、生徒は悩み苦しんでいました。絵のテーマが重くのしかかってきましたが、人格を形成する大切な時期に、自分の気持ちを表現し、それを他の人たちに伝え、ありのまま受け入れてもらうことは大切です。それでこのテーマを追求し続け、自分の思いを表してもらったんです」

生徒たちは、自分の作品に思い思いのコメントを書いている。

チマチョゴリを着た女の子。その周りを朝鮮や日本の新聞の切り抜きで囲んだコラージュ。よく見ると、チマチョゴリが乱れている…。

「私たちは日本と朝鮮の間にいます。朝鮮人だけどやっぱり日本びいきをしたりします。私たちは日本でも祖国でも『在日朝鮮人』なのです。一見、ショボイ私たちですが、同時にそれは私たちの強みだということを、このコラージュで表現しました。私たちは中途半端な位置にいますが、私たちにしかできないことがあると思います」

風に流されていくチマチョゴリを第2制服を着た女の子が髪をなびかせながら必死に追いかけている絵には…。

「私たちが在日は祖国を求めています、日本社会の厳しい情勢のなかでは完璧にそれを自分のものにとらえきれない現実を表しました」

在日コリアンの子どもたちが受けた心の傷を、日本人に返すのではなく、前向きに生きることで乗り越えさせたい。美術の教師である金先生のそんな思いが実現したのが「南北 코리아 と日本のともだち展」

だった。北朝鮮への人道支援にかかわってきた「カリタス・ジャパン」をはじめ、「KOREA子どもキャンペーン」など非政府組織（NGO）8団体、「単に食料支援だけでなく、相互の人間交流が必要だ。その第一歩として小学生の絵による交流を始めよう」と呼びかけ、2001年に第1回南北 코리아 と日本のともだち展が東京で開かれ、日本、韓国、北朝鮮に住む子どもたちの絵180点が集まった。日本各地での地方展、そしてピョンヤン展、韓国のNGO「南北オリニオッケドンム」との協力によるソウル展も開かれた。

将来に大きな希望

2002年秋には、金先生と朝鮮学校の生徒たち3人が初めて韓国を訪れ、ソウル展に参加することができた。

「南北に分断された祖国の間で、朝鮮籍の私たちは故郷である南の地を訪ねるのは容易ではありません。それが6・15首脳会談後、民族の和解が進み出したことや、絵画展にかかわるさまざまな人たちの手助けで実現できたのです。日本でより豊かな民族教育をしていくためには、私たちの力だけでなく日本人たちと共に理解し合い、協力し合うことが必要だと実感しました」

2003年7月の東京展では、同時に「ともだちワークショップ」も実施。朝鮮学校の生徒たちも参加、韓国からやってきた子どもたち11人を交え、自己紹介やゲーム、そして「いつかは出会う未来の友だちにに向けて」という絵画展のテーマに沿って自分の思いを描いた。

「うれしかったことはこのワークショップで、在日の生徒たちは日本と韓国の子どものために通訳をし、自分たちの存在意義を確認することができたことです。北と南と日本の橋渡しができるという夢がふくらんで、将来に大きな希望を持ち始めています」

8月には絵画展の実行委員と共に金先生と朝鮮学校の生徒4人がピョンヤン展に参加、人間同士の交流の輪は着実に広がっている。

あの時、父の話を聞いていれば…

「〇〇線は××駅での人身事故のため、運転を一時見合わせています…」最近、電車に乗っていると、こんなアナウンスをよく耳にする。一瞬自殺に追い込まれた人の身の上に思いめぐらせたとしても、しょせんは他人事。スケジュールの遅れを取り戻そうと、いらだちはするものの、残された家族の精神的、経済的な苦痛や、いまでも自殺しようかどうか逡巡している人たちが、身の回りにいることまで考えがおよぶだろうか。社会的に追い詰められた人に対するセーフティネットの構築が求められている。私たちはその役割を果しているだろうか。「あの人の話を聞いてあげていたら」という悔いだけは残したくない。そんな思いから、1999年に父親（当時44）を自死で失った大学3年の直之さん（22）＝仮名＝に会って、話を聞くことにした。

あれが僕へのサインだったかも

直之さんは待ち合わせの時間に数分遅れたことを、何度も丁寧に謝った。非常に落ち着いた感じの直之さんは、先頭に立って駅の雑踏を通り抜け、静かな喫茶店に私たちを案内してくれた。

「離婚して一人暮らしをしていた父が自殺したのは今から4年前、僕が高校3年の秋です。いつものように学校から帰ったら、家の様子がおかしいんです。しばらくすると仕事に行っているはずの母が帰ってきて、僕と弟を呼んで、『お父さんが死んだ』と…。弟は自分の部屋のベッドに倒れ、僕は母の言った言葉が信じられませんでした」

とっさに直之さんは1か月前の父からの電話を思い出していた。家から10分離れたアパートで母子だけで暮らすようになってからも、毎月1回は直之さんのPHSに電話を寄越す父親だった。だが、その日に

限って声の調子がおかしかった。

「いつも父は『元気にしているか』と言い、弟や母のことを聞いたんですが、話は弾まない。その時の声はいつもと少し違った感じがして、最後に、『お父さん、もう自殺しなきゃいかなのかなあ…』と言ったんです。父は強い人で、『自殺なんて絶対にいけない』って言ってた人でしたから、何言ってるの、と冗談で返して、まともに受け止めませんでした。でもあれが僕へのサインだったかもしれない。父に会って、ちゃんと話を聞いていれば、父は死ななかつたんじゃないか。そのことを今でも後悔しています」

倒産、転職したが…

1年間の自殺者が、5年連続して3万人を超えた。特に長引く不況、リストラ、過酷な競争などの影響で、中高年を中心に「経済・生活苦」を原因とした自殺者が2002年には過去最高の8千人近くに達している。毎日平均22人近くが命を絶っている計算になる。直之さんの父親も例外ではない。当時、失業と借金返済に追われていた。

「父は自動車会社の下請け工場を経営していましたが、中学2年の時、経営が苦しくなってやめ、コンビニを始めたんです。酒類やたばこの販売権を取るため、母が店長になって昼間は店に出て、夜は父が交代という生活でした。父は自分にも他人にも完璧さを求める人で、口が達者。母は口で返せないので手で返す。前からけんかは絶えず、店を始めてからも仕事のことで始終けんか。どっちかが相手を刺すんじゃないかと怖くって、離婚したほうがいいと思っていました」

高校2年のとき、母親から離婚を切り出し、父親は一人家に残って一人暮らしを始めた。

「父を独りにして母と暮らすのは抵抗がありました。二人ともけんかはしても、僕や4歳下の弟のことは愛してくれていたと感じていましたから。遊びに連れて行ってくれたし、進路の相談にも真剣にのってくれたし、でも『お父さんはいいから、お母さんと一緒にいてやっ

てくれ』と父に言われて…。その真意はわかりませんでした…」

離婚して間もなく、父親はコンビニを閉めた。周辺に同じようなコンビニができて競争が激化、客をとられてしまったためだ。

「父は仕事一筋の人間だったから、それがとてもつらかったんだと思います。一度だけ何かの用事で父の家に行った時、部屋があまりにも汚くて、すごくショックだったのを覚えています。食べた後の丼やフライパンがそのまま、洗濯物が部屋につるしてあったり…。父の友人が心配して訪ねても、家から出てこないこともあったそうです」

だれかに気付いてほしかった

自殺しようとする人は、その前に、ふさぎ込んでいたり、何らかのサインを身近な人に発していることが多い。父親は借金を抱えていた。後で分かったのだが、自殺した日に保険を解約、死亡した時間も借金返済のことで伯父と話をする約束をした時刻だった。

「父はどんなことがあっても、自分が死んだ時のためにと保険の解約をしませんでした。それが、亡くなる日の朝に解約していたんです。伯父が父の元を訪ねたけれど、父の姿が見当たらない。友だちと飲みにも行ったのだろうと軽く考え、そのまま伯父は帰ったんです」翌朝、祖母が父の好きな柿を持って訪ねると父は見当たらず、前に働いていた工場の扉を開けると父親はそこで死んでいた。使った紐は、新聞紙を束ねる時に使う細いビニール紐だった。

「あの時気付かなかった伯父を恨む気持ちはありません。工場には鉄の鎖だって置いてあったのに…。母は『お父さんは自分の生命を試したんだよ』と後で言っていました」

母親は夫婦ではない父親の葬儀に出ることで親類からいろいろ言われることが嫌だったので出席しなかった。

「母は通夜も葬儀の時も、他人がいる時には父の家に来ることができませんでした。でも火葬場に行く時だけは霊柩車から母に電話して、『だれに何と言われてもいいから来てよ』と頼み、来てもらいました」

親が自殺して後に残された遺児は全国で12万人にものぼるとみられている。精神的に耐えがたい苦痛をもたらし、嘆きのどん底から脱出するのに大変な時間と労力が必要とされる。

「父が亡くなってから僕は通夜の時も、火葬場でも人目も気にせず泣いてました。何でこんなことになってしまったのか。葬式の後も毎日、写真の前で何時間も泣いてました。父は本気で死ぬつもりはなかった、だれかに気付いてほしくて、だれかに助けてもらいたかったんだと思います」

思いとどまってほしい

1年の浪人生活の後、大学に進学。親の病死や事故死で残された子どもを対象にした「あしなが育英会」から奨学金を借りた。

夏に直之さんは、育英会主催の4泊5日の「つどい」に参加した。そこで同じ問題を抱えた仲間に出会い、話を聞き、思いを語ることで嘆き続けていた呪縛から自分を解き放つことができたのだった。

「自分と同じ父親を自殺で亡くした人がいて、その人の話を聞いたら自分も話をしたくなった。話さなきゃって思って話をして、その時点で終わりましたね。話をして楽になったし、自分以外に苦しんでいる人がいて、いや、もっと自分より苦しんでいる人もいて…」

日本は「自殺大国」になりつつある。主要99か国を対象としたWHOの調査（2002年）では、日本の自殺率は11位だが、OECD加盟国の中では2位、G7各国の中では1位である。

直之さんは年に何回か街頭募金で、街行く人々に体験を話す。

「今、苦しんで自死を考えている人には、どうにかして思いとどまってほしい。社会の人々には、いろんな原因で一人で苦しみを抱え込んでいる人を放っておかないように、自死遺児には『一人ぼっちじゃないよ』という思いを伝えて、自分のような経験を持つ人を一人でも減らすことに役立ちたいと思うからです」

差別は人を殺す道具です

「ウチ、部落じゃないけど、みんなで手をつないで差別をなくしていければいい。小学生の時、クラスで無視された経験から人権問題を考えるようになった。一緒に手をとって頑張ろう」「母は外国人。小さいときに外国人差別を受けたのに、中学生の時、自分が差別していて、親父にきつく怒られた。差別って何か考えていた。みんなの話を聞いて、これから差別のことを話していこうと思う」

2003年7月に京都で開かれた「部落解放第35回全国高校生集会分科会」の報告を特集した「解放新聞」（9月15日付）には、こんな参加者の感想がたくさん載っている。

差別される側の痛み、苦しみについて、とかく私たちは無関心になりがちである。同じ人間でありながら、貧しさ、偏見ゆえに人間の尊厳を傷つけられる。学校や職場でも、いじめはなくならないどころか、隠微な形で深く潜行しているのが現実である。差別、偏見をなくするために高校生集会に取り組んできた「部落解放同盟京都連合会」青年部長、吉田寿（ひさし）さん（35）に京都で会い、話を聞いた。

「死ね」と言われ続けた私

「ぜひ、読んでください」と吉田さんが渡してくれた解放新聞の「分科会報告」には、各地から参加した高校生の発言が載っている。

その一人、良子さん＝仮名＝は中学3年の時、仲間にいじめられ、顔を合わす度に「死ね」と言われ続けた体験をつづっている。

「いじている子は3年生の女子の中でも中心的な人物だから、私は言い返せなくて。その子たちと体育の授業で一緒になる。大丈夫だろうと思っているけど、その人がいると怖いし、楽しいはずの授業が、

その人がいるだけで、私の意識はその子だけにいってしまう」

ある日、身体の具合が悪く学校を休んだ。いじめを受けていることは親に打ち明けられなかった。

「なぜなら、『死ね』と言われ続けた時、いつも『私が部落出身だから』ということが頭をよぎりました。私が部落だとみんなが知ったら、もっといじめられるのではないかという不安や、どうして私だけという腹立たしさも頭のなかでは出てきたんです」

そんな時、「同和教育」の講演会の後、クラスに戻ったら、男子生徒のA君がB君に「お前はえた・ひにん」と言ったのを良子さんは耳にした。

「自分さえ耐えていれば納まる。部落出身がわかり、もっといじめや差別を受けるかもしれない」と、最初は黙っておこうと思った。しかし、「黙っていたら何も変わらないし、バカにされたくない」と、良子さんは「解放子ども会」の仲間に話をした。

「解放子ども会の仲間との間には壁がないと思えるようになりました。高校に入り、親友ができ、彼女は何でも自分のことを話してくれました。自分も思い切って、いじめられたこと、部落出身であることを話すと、泣きながら『私にできることない?』と言ってくれました。いまは母親とも話すし、自分のことを語っていけるように自分が変わりました」

見えにくくなった部落差別

いじめられたり、差別されたりした体験を具体的に語り、仲間の話に耳を傾け、さらに自分の思いを言葉にしていく。そうすることで、差別や偏見のない社会をつくっていくにはどうしたらよいかを考えられるようになっていく。その場が高校生集会である。

「私は16歳の時からずっと集会には参加してきています。活動報告のなかで、いわゆる親の生い立ちだとか、生の報告が出てくるわけです。その具体的な話を聞くなかで、高校生たちは部落差別を実際に感

じているのではないかと思います。というのも部落差別が目に見える形で存在している時代がありました。それに比べ今は、差別がうまくいかくぐっていて見えない。部落差別という言葉だけでは実感できない部分があるのじゃないかと思います」

吉田さんは高校生集会での若者たちとの出会いを大切にしてきた。

「この集会に参加する時点では、既に部落差別の厳しさやしんどさを体験している子もいますし、また地域でそういったことを教えられずに『本当に部落差別って何やろう』という疑問を抱きながら参加している高校生もいます。普段は見えにくくなっている差別がポーンと入ってきたとき、『まだ、こんな差別があったのか』という感じ方をする子が多いです」

ある日、突然、結婚差別が

多くの場合、就職とか結婚のときに差別に直面するといつてよい。付き合っている相手に、部落の問題を告げるべきかどうか、相手が受け入れてくれても、家族が認めてくれるかどうか。そのためにどうしたらよいか思い、悩む。差別撲滅のために青春を注ぎ込んできた吉田さん自身、自分の問題として直面させられたのが結婚差別であった。

「私の彼女は部落について、いろんな話を聞いていました。それで親に話をしたら、親は猛烈に反対した。それまで私は高校生の集会に参加して、いろいろなことを知っていたつもりだったけれども、その時、私は初めて部落差別というものを実感したんです。彼女の父親は話を聞いてくれない。『付き合いのいいけれど、結婚はだめだ。部落の血を家系に入れるわけにはいかない』と。何とかして彼女を励まし、差別を乗り越えようとはしましたが、結局、彼女を支えることができませんでした。今は彼女ではなく、同じ部落の人と結婚しました」

吉田さんも、その壁を突き崩すことができず、悔しさに泣いた。日本社会に根深く残る差別という呪縛の恐ろしさを実感したのだった。

差別で命を落とした人も

「差別というものは人を傷つけるだけでないんです、人を殺す道具なんです。差別、特に部落差別によって、尊い命が奪われてきた実態があるんです。実態の厳しさは人の命を奪うというところにあるんです。私も現実には結婚差別を受けて自殺した人を知っていますし、自殺したかったけれど、仲間に助けられたこともあるという話も、集会の中で聞いています。今も、いろいろな場面での差別を受けている若い世代がいるわけで、その子の感じ方によって命を落としかねないこともあるわけです。そういうもんなんや差別は、ということ伝えていかなければならないと思います」

「差別は人を殺す道具なんです」という言葉を吉田さんが口にしたとき、彼の穏やかな表情とは裏腹に、その言葉の持つ意味の深さに思わずハッとさせられた。単に部落差別だけでなく、過酷な競争を強いられ、いじめが日常茶飯事となって追い詰められている子どもたち、親、そして教師に向けられているのではないかとさえ感じた。

部落差別問題は、一人ひとりの人間に深く刻み込まれた差別感を洗い落としていく作業でもある。そのためにも差別を受けた人たちが体験を情報公開していくことが求められている。それは当事者にとってはつらい、厳しい作業である。吉田さんは最後にこう結んだ。

「私は親から『解放運動をやめろ、一銭の得にもならんことをするな』と言われました。それで私の解放運動はこの親を変えることから始まるんだと思いました。家族から共感というものがありませんでしたから、すごく苦しい部分がありました。だけど、今となってはそれが誇りとなっている部分もあります。自分の思いや考えを出していくことのできるいい訓練になったことを感謝しています」

私はベトナム人なのか、日本人なのか

1975年にサイゴンが陥落、船で脱出、日本に定住したベトナム難民が11,000人いる。そのほとんどは神奈川、埼玉、兵庫などを中心に全国各地で生活している。日本で新たに生まれた子どもたちはどんな生活を送っているのだろうか。「日本カトリック難民移住移動者委員会」が2002年に実施した「外国籍の未就学児に関するアンケート調査」では、中学を卒業した15歳以上になると、学校に行かない生徒が急増することがわかった。「言葉がわからない」「勉強が難しくなった」「いじめられた」「友だちがいない」といった理由が多い。差別や偏見などから、生きる希望をなくしている子もいる。そんなドロップアウトした難民の子どもたちを人権の視点から把握するのは実に難しい。取材にもなかなか応じてくれないのが実情である。

今回、取材できたのは学校の成績もよく、友だちもいて、順調に成長している高校3年生のグエン・ティ・ホンハウさん（18）である。しかし彼女も思春期には、自分が日本人なのかベトナム人なのかアイデンティティが揺れ動き、親に反抗したこともあった。多文化に生きるベトナム難民の子どもたちの生きる姿をたどることにしよう。

3 兎を抱えてベトナム脱出

東北本線宇都宮駅から烏山線に乗り換えて1時間、終点の烏山駅から歩いて10分の所にカトリック烏山教会がある。日本家屋を改造した教会の聖堂は、8畳2間をおち抜いた畳の部屋。現れたグエンさんは、ジーパンをはき、ボーイッシュな雰囲気を漂わせる高校生だった。

「すぐ上の姉と私は日本に来てから生まれたのですが、両親がベトナムから脱出する時のことや、ベトナムのことは、思い出話として親

から聞かされていきました。ベトナムが私の母国だと聞かされていたけれど興味もなく、遠い国という感じを持っていました」

両親が姉3人を連れ、小舟でベトナムを脱出したのは今から22年前のことだ。父親は当時のベトナム新体制を嫌い、また食料難で貧しく、子どもたちの将来を考え、脱出を決意した。1回目は失敗。2年後に再び決行。途中、多くの外国船に行き交ったが、かかわりを恐れてか通り過ぎて行った。日本船もいったんは通り過ぎたものの、戻ってきて全員救助された。長崎の大村収容所を経て、全員フィリピンで2年間の生活の後、栃木県・烏山の難民キャンプに。両親は工場で働き、5人姉妹は日本の学校に通った。

「幼稚園のころまでは、家ではベトナム語で話をしていましたが、4人の姉が日本語を使っていたので、自然に日本語を覚えました。そして私は外国人という意識を持たず、学校でも日本語に不自由はしませんでした。しかし小学4、5年生ころから学校で配られるプリントを読めない両親を、『なぜ読めないの?』と責めたり、少し反抗的になっていきました。親との会話でも、何か聞かれてもベトナム語でうまくこたえられない私にいらだったりしました」

「この子は日本人」と言う母に傷つく

自分がベトナム人であることを意識し始め、外国人であることを重荷に思い、劣等感を感じたのは小学6年、思春期に入るところだった。

「中学生になっても、両親のことは頭では理解したつもりでしたが、今思うと、心から理解できていなかったと思います。中学3年の時、家族でベトナムを訪れたんです。日本には親類はなく、ベトナムで初めて親類に会い、『ここが私の故郷なのだ』と実感しました。と同時に私がベトナム人であることが嫌ではなくなったんです」

日本では日本人と間違われることが多かった。ベトナムでは予想通り、ベトナム人ではなく、外国から来た観光客と思われた。そんな時のことだ。ショックな出来事が起きた。

「海岸に遊びに行って、押し売りにまわりつかれている時、母は私をかばって『この子は日本人です』と言ったんです。その言葉に私は深く傷つきました。あこがれていた祖国での出来事。はたして私は何人なのという疑問と、言葉で言えない寂しさ。そういう私の気持ちを十分にベトナム語で伝えられないことに気付き、ベトナム語を勉強しようと思っていた矢先のことだったんです。ベトナム人になろうとしていた私を弁護しないで、日本人だと言われたときのショック。その母の言葉、そういう母に耐えられず、だれも私のことは分かってくれないと泣けてきました。私のルーツや、多分ないであろう国籍のことを考え、私はどこにも属さないという不安があったんです。故郷というと、国単位で人は見がちですが、私はそこにいる友だち、親類、思い出がふるさとなるのではないかと今は思っています」

私を変えた6か月のベトナム生活

それから3年間。彼女は自分のアイデンティティがどこにあるのかを思いめぐらし悩み、苦しんだ。その思いを高校1年の時、「国際理解英語コンテスト栃木県大会」で英語で訴えた。優秀賞を受賞した。

高校2年の時、休学してベトナムへ行くことにした。サイゴンから車で8時間ほど離れた観光地にある叔父の家に泊まり、家庭教師からベトナム語を学び、夜は、貧しい子どもたちのための夜間小学校に通った。そこで小学校程度の内容の授業を受けたが、1か月後、留学証明を取るため定時制高校に移った。そこには16歳から40歳までの労働者が熱心に学んでいた。

「私の心の問題を軽くしたかったんです。学校に通う生徒たちの家庭は貧しく、路上で生活したり、観光客からお金をもらったり、7歳でベビーシッターをしている子もいました。彼らとはすぐ仲良しになりました。でも学校では友だちとして扱ってくれていたのに、学校を離れ、道路で会った時、お金をもらおうとして出した手を、相手が私だと気付くとあわててひっこめたこともありました。その時、その7

歳の子が私をどう思っているか悩んだりしました。定時制高校では3、40歳の人たちが多く、お坊さんだったり、みんな働いていて、その人たちと私の接点はありませんでした」

6か月間、ベトナムで生活し、ベトナム語で話したり、字も読めるようになった。そして自分は恵まれていると実感した。

2つの国が私の心に

「両親が命懸けで日本に来てくれなかったら、私も彼らと同じように働いていたのではないかと、思ったんです。両親が故国を捨て、日本に来てくれたおかげで、恵まれている今がある。私には何かしなければならぬことがある、という使命感を持つようになったんです」

日本の中学、高校の友人たちは、国籍には無関心だった。難民が存在することさえ知らず、無神経な言葉を使う生徒もいた。

「私の国籍はどうなっているのか分かりません。しかし私の心のなかには、ベトナムと日本という2つの国が存在しているんです。このことを私のなかで受け入れていて、それがハンディとしてではなく、私にできることは何かという意識を持たせてくれている感じです。私の心のなかには、国際的な意識が強いのです」

2004年3月に高校を卒業。すぐ上の四女の姉が通う宇都宮大学国際学部で推薦入学で進学することが決まった。

「最近のベトナムの急速な発展には疑問を感じています。ベトナムには家族とのつながりがあり、子は親を心から尊敬し、子は親を助けようとする気持ちがあります。でも日本人の友人を見ていて、お金や物質の豊かさは人を変えると思います。ベトナムはまだ日本のようにはなっていませんが、日本と違った良い発展の仕方があるのではないのでしょうか。日本のようにベトナムが変わっていくのは悲しいです」

現在、父親は宇都宮近くの自動車工場で、また母親は化粧品をつくる工場でそれぞれ働いている。ベトナムで生まれた3人の姉のうち長女は結婚、二女は働き、三女は大学で学んでいる。

『ひびき』に寄せられた意見から

『ひびき 2004』編集委員会

2003年『ひびき』に寄せられた意見から抜粋で幾つかをご紹介しますと思います。(原文のまま)

- ▽「…耳をふさぎたくなるような、迫ってくるような、激しい“叫び”、自分でも矛盾すると思ひながら聞きたくないことでも聞かなくてはいけない…“叫び”を共有することは、自分の心にある”叫び“がこだまして、“ひびき”となつて、心が動かされる」(50歳／女性)
- ▽「家庭内暴力、児童虐待が原因で離婚をしました。信者として、自分は教会に出向く資格がないのではないかという罪意識に苛まれ、苦しんでいます。…まだ、私も子どもも児童虐待防止センターで心のケアをしていただいている段階ですので、人様の助けができる身分ではありませんが、いつか私も立ち直つて、『ひびき』のように、人の痛みの傍らに座つて共感してあげられるだけの力をもちたいと思ひました」(36歳／女性)
- ▽「障がい者である私は介助をしていただきながら生きている。でも、おんぶに抱っこでなくて、介助してくれる友と一緒に真剣に前向きに、私なりに自立して生きたい、…共感し、助けられながらも、この世の続く限り、“叫び”と“ひびき”はこだまし合つていくのではないかと正直に思ひました」(58歳／女性)
- ▽「未婚の女性の出産について、話し合うことのできる教会があることはすばらしい。心が傷つき、痛み、苦しみ、悩む多くの人たちに対して教会のなかの人間関係は、そのような人の話をきいても、上滑りで、一人一人の悩み、苦しみを聞こうとしない。…教会は現実社会から逃避している…」(58歳／男性)
- ▽「…真剣に生きようとしているのに、そのような気持ちを挫折させてしまうことが教会にはあまりにも多い」(57歳／女性)

- ▽「…病氣療養中に四旬節を迎え、真正面から神に向かい合っただけの日々です。『ひびき』を送られ、…支えと助け、世界、地球全体の人類が今どう生き、幸せを求めべきか、…考える時は今、現在だ」(69歳、女性)
- ▽「配偶者からの性的、言葉、経済的などさまざまな虐待の数々を受けました。“俺は3万円あれば生活できる、だからお前も3万円で生活しろ、”“俺が働いて、俺が養っているから、俺の命令に従え”…挙げ句の果て、この男、退職金、年金受給と同時に家を出ていきました。今は平常心で暮らしています。感謝」(67歳/女性)
- ▽「東京から長崎までの長距離電話で家庭内暴力で傷ついている知人の泣き泣き話を、何もしてあげられない私は、祈りながら、静かに聞いてあげることでだけです」(70歳/女性)
- ▽「26歳のとき、離婚、再婚相手は7歳年下で、家族から勘当され、初めての妊娠は子宮外妊娠。そのしんどさ、辛さがありながら、その4年後、2人目を妊娠。たまたま、その前に夫が車で人身事故を起して金銭のゆとりもなく、人生のどん底にありました。そして、私は、手術の苦しさと女性としての機能を失うことの恐さ、“中絶したい”と叫びました。…この苦しみを打ち明けたシスターは、あなたの気持ちはわかるよ、でもいのちは神様からのもの、神様から、あなた、選ばれて期待されてるのよ、とさりげなく言われました。私の叫びを非難せず、わかるよ、の一言。そして、こんな私を受け入れてくれる神様がいる…去年の1月、女の子が生まれました」(36歳/主婦)
- ▽「『叫び』シリーズが『ひびき』に変わってしまって、残念です、『叫び』の良いところは、カウンセラー、司祭、友人にも言えない、理解されない苦しみの声をあげる一つの窓口になっていたことです。“叫び”をきいてもらえる、癒されるまではいかずとも、救われる部分がありました」(41歳/主婦)
- ▽「『叫び』シリーズや『ひびき』は神父様方や修道女の方々にはどう読まれているのでしょうか。読んでいて、共感したり、癒されたいと感じた時、教会のどこに行けばいいのでしょうか」(63歳/男性)
- 紙面の都合上、多くを紹介できませんでしたが、去年のアンケート回答は電話、ファクスなどを含めて70余件がありました。ありがとうございました。

これらの意見は編集関係者で読み合わせ、翌年の四旬節課題小冊子の企画の参考にさせていただいております。なお、回答者の方のプライバシーを守る意味で回答用紙は「ひびき」編集部が責任をもって管理しております。

『ひびき2004』についてもご意見をよろしくお願い申し上げます。

2004年1月15日

お願い

本誌の編集にあたり、下記の点に留意しておりますが、お気付きの点がありましたら、ご指摘、ご教示いただければ幸いです。

- (1) 面談者のプライバシーにさしさわる関係者、場所、その他名称、氏名、住所、固有名詞等については、本人の承諾をいただいた方以外は、すべて仮名とさせていただきます。
- (2) 差別語、不快用語につきましては、厳正な検討を加えて注意をはらいましたが、面談者の用語、用法はそのまま使用している場合もあります。

『叫び』 合本 1997—2002 のご案内

『叫び』シリーズの合本をお求めの方は、(『叫び』 合本 1997—2002)と書いて、注文数、送付先を明記の上、カリタスジャパン事務局宛お申し越してください。なお、送料等を含めて、1冊につき500円をご負担願えれば幸いです。申し込みを受付次第、合本と郵便振替用紙を送付させていただきます。

よろしくご協力をお願い申し上げます。

2004年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

2004年度四旬節キャンペーン資料として例年のように、『四旬節メッセージ』、四旬節課題小冊子『ひびき2004』、ポスター、献金箱、献金袋を用意いたしました。各小教区には「灰の水曜日」の前後に届くよう手配しておりますが、追加要求につきましては下記の各々所属教区宛にお問い合わせください。

尚、『四旬節メッセージ』『ひびき2004』には点訳本、録音テープが用意されております。

- | | | |
|-----------|---|---|
| 札幌教区事務所 | 〒060-0031
札幌市中央区北一条東6丁目10
札幌教区本部事務局 | Tel 011-241-2785
Fax 011-221-3668
e-mail: dio-office@csd.or.jp |
| 仙台教区事務所 | 〒980-0014
仙台市青葉区本町1-2-12
仙台教区本部事務局 | Tel 022-222-7371
Fax 022-222-7378
e-mail: kyoku-office@sendai-catholic.jp |
| 新潟教区事務所 | 〒951-8106
新潟市東大畑通一番町656
新潟教区本部事務局 | Tel 025-222-7457
Fax 025-222-7467
e-mail: nig-cur@ecatv.home.ne.jp |
| さいたま教区事務所 | 〒330-0061
さいたま市浦和区常盤6-4-12
さいたま教区本部事務局内
カリタスさいたま | Tel 048-831-3150
Fax 048-824-3532
e-mail: saitama-kyoku@nbn.nifty.com |
| 東京教区事務所 | 〒112-0014
東京都文京区関口3-16-15
東京教区本部事務局 | Tel 03-3943-2301
Fax 03-3944-8511
e-mail: info@tokyo.catholic.jp |
| 横浜教区福祉委員会 | 〒211-0064
川崎市中原区今井南町500
中原教会 | Tel 044-722-6060
Fax 044-733-9311
e-mail: fukushi@japan.interq.or.jp |
| 名古屋教区事務所 | 〒466-0037
名古屋市昭和区恵方町2-15
名古屋教区社会福祉委員会 | Tel 052-852-1426
Fax 052-852-1422 |

- 京都教区事務所 〒604-8006
 京都市中京区河原町通三条上ル Tel 075-211-3025
 京都教区本部事務局 Fax 075-211-3041
 e-mail: cathonbu@mbox.kyoto-inet.or.jp
- 大阪教区事務所 〒540-0004
 大阪市中央区玉造2-24-22 Tel 06-6941-9700
 大阪教区本部事務局 Fax 06-6946-1345
 e-mail: auxbpsec@osaka.catholic.jp
- 広島教区事務所 〒730-0016
 広島市中区幟町4-42
 広島カトリック会館 Tel 082-221-6017
 広島教区本部事務局 Fax 082-221-6019
 e-mail: tob7105@mocha.con.ne.jp
- 高松教区事務所 〒760-0074
 高松市桜町1-8-9 Tel 087-831-6659
 高松教区本部事務局 Fax 087-833-1484
- 福岡教区事務所 〒810-0028
 福岡市中央区浄水通39 Tel 092-522-5139
 福岡教区本部事務局 Fax 092-523-2152
- 長崎教区深堀教会 〒851-0301
 長崎市深堀町5-292 Tel 095-871-3459
 Fax 095-871-3464
 e-mail: mituyo@ngs2.cncm.ne.jp
- 大分教区宮崎教会 〒880-0806
 宮崎市広島 1-3-23 Tel 0985-27-6662
 Fax 0985-32-5691
 e-mail: santiagoflor2000@yahoo.co.jp
- 鹿児島教区事務所 〒892-0841
 鹿児島市照国町13-42 Tel 099-226-5100
 鹿児島教区本部事務局 Fax 099-225-0440
 e-mail: kagoxavi@poem.con.ne.jp
- 那覇教区事務所 〒902-0067
 那覇市安里3-7-2 Tel 098-863-2020
 那覇教区本部事務局 Fax 098-863-8474
 e-mail: BishopNAHA@aol.com

事前に当協議会事務局に連絡
することを条件に、通常の印
刷物を読めない、視覚障害者
その他の人のために、録音又
は拡大による複製を許諾する。
ただし、営利を目的とするも
のは除く。なお点字による複
製は著作権法第37条第1項に
より、いっさい自由である。

「四旬節キャンペーン課題解説」No.18 2004年

「ひびき 2004」

2004年2月25日 発行

編集 日本カトリック司教協議会

社会福祉委員会・カリタスジャパン

発行 カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411

カリタスジャパン 電話 03-5632-4439 (直通)

印刷 精興社



カトリック教会

カリタス ジャパン

CARITAS JAPAN

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館 TEL 03-5632-4439 FAX 03-5632-4464